

国際教養大学の学生・卒業生による起業の状況(前編)

2004年秋田市に開学した国際教養大学は、1年間の海外留学義務化などユニークな教育方法で知られ、就職の面で優れた実績を残している。一方で、卒業生の秋田県内への就職は少なく、県費を投入している割に人材供給の面で地域貢献が少ないのではないかという意見もある。

しかし、国際教養大学の学生・卒業生による県内での起業の事例をみると、数は少ないものの地域に強いインパクトを与える事業が注目される。本レポートでは今月号と来月号の2回に渡り、そのような起業の事例を紹介する。

1 国際教養大学卒業生の県内就職の状況

(1) 秋田県議会での質疑

令和3年6月25日、秋田県議会6月議会の総務企画委員会で次のような質疑が行われた。

鈴木洋一委員(県議会議員)「国際教養大学の卒業生は、毎年どれぐらい県内に就職していますか。」

高等教育支援室長「今年の春の卒業生のうち7名が県内に就職しております。ここ数年の状況を見ますと6名から8名、あるいは少ないときは1名というときもあるなど、10名に届かないという状況でございます。」

鈴木洋一委員「200名近い卒業生がいて、県内就職者が6名、7名というのは、やっぱり少ないのではないかと思います。県費を掛けているという面から見れば、何となくもうちょっといてもいいのかなと思いますか、いかがですか。」

高等教育支援室長「県内で就職して活躍していただきたいという思いはございます。」

※秋田県議会会議録より、発言内容は一部を記載

(2) 優れた就職実績と県内就職の少なさ

国際教養大学(以下、「A I U」)は、2004年4月、秋田市雄和の秋田空港や県立中央公園に近い場所に開学した。全学生がリベラルアーツを学ぶ単科大学であり、約840名の学生がこの大学で学んでいる。

リベラルアーツとは、古代ギリシャ・ローマからの流れを汲む学問であり、自分の意思で自由に生きていくために身につけるべき技芸を意味する。現在では、人文科学、自然科学、社会科学の分野にわたる実践的な知識を学ぶ教育となっている。

A I Uは、リベラルアーツの単科大学であることを含め、日本の大学としては極めてユニークな教育方法を採用していることで知られる。例えば、授業はすべて英語で行う、少人数教育を徹底(1科目当たり平均登録学生19名)、在学中に1年間の海外留学を義務化、新入生は外国人留学生とともに1年間の寮生活を送る、24時間365日開館の図書館を運営などである。

この特徴的な大学生活を経てA I Uから巣立った卒業生は、就職の面でめざましい結果を残しており、就職率はほぼ100%を続け、日本を代表するような有名企業に多くが就職している。ユニークな教育方法と卓越した就職の実績からA I Uの入試難易度は高く、地方にある歴史の浅い大学でありながら東京大学、京都大学と同等の難易度レベルとなっている。

反面、この優れた就職実績は、秋田の地にあるA I Uで学んだほとんどの学生が卒業後に秋田を離れることを意味する。冒頭で紹介した秋田県議会での質疑はその事実を反映している。

A I Uの学生も地元の秋田県民からその事と言われることがあるという。県内高校生の海外留学推進のため活動しているA I U生は、その活動で出会った県内経営者から「こうやって活動しているのは素晴らしいけど、きっとこういう若者は秋田に残らないんだろうなあ」と言われた経験を持っている。

確かに、卒業後県内に残るA I U生が少ないことは事実である。しかし、A I Uの秋田県への貢献を卒業生に占める県内就職者という数字だけから判断できるものだろうか。

A I Uの学生や卒業生が県内で起業した例をみると、地域に与えるインパクトがとても強く、総体的に考えて、県内に残る人数から想像されるよりはるかに大きな存在感を示している。以下にそのようなA I Uの学生・卒業生による秋田県内での起業の事例を紹介する。

2 A I Uの学生・卒業生による県内での起業 (1) 株式会社アウトクropp



栗原エミル氏(左)、松本隆慈トラヴィス氏

「あきた経済」2021年8月号『秋田県内の映像制作産業の動向』で紹介した通り、映像制作会社・株式会社アウトクroppは、A I U在学中の栗原エミル氏、松本隆慈トラヴィス氏の2人により創業された。

栗原エミル氏は京都府出身、2015年秋に入学

したA I U12期生。松本隆慈トラヴィス氏は北海道出身で2016年春入学の13期生である。

栗原氏は、高校生時代に中嶋嶺雄A I U学長(当時)の「なぜ、国際教養大学で人材は育つのか」を読み、リベラルアーツを学ぶことで多角的な視野を持つ可能性、日本中、世界中から多様な学生が集まる点に惹かれた。また、受動的、画一的な大学教育に疑問を感じていた松本氏は、A I Uがしっかりしたリベラルアーツの教育を行う点、多くの一次文献を読むために必要な英語を実践的に学べる点に惹かれた。

アウトクropp創業に至る経緯等は、前述の「あきた経済」2021年8月号のレポートにゆずり、本レポートではその後の展開を紹介する。

同社はA I Uに近い秋田市雄和を拠点に創業したが、当時の社屋は夏の暑さ、冬の寒さが厳しく移転を考えていた。そんな時、取引先に紹介されたのが秋田市中心部、中通にある一軒の2階建の古民家だった。栗原氏たちは、その昔ながらの佇まいに魅力を感じてぜひ活用したいと考えた。そして、10年以上使われていなかったその古民家をリフォームし、2021年8月、アウトクroppの新たな拠点にした。

新拠点の2階には映像制作など本社機能を置いた。1階部分に作ったのが小規模な映画館「アウトクroppシネマ」である。

栗原氏たちは、ドキュメンタリー映画「沼山からの贈りもの」の上映会を各地で開いた経験から、そのような上映会は会場費等のコストがかかる上、一方的に映像を届けるだけになっているように感じていた。制作した作品を丁寧に届け、観る人との双方向のコミュニケーションを可能とする場として、客席16席の本シネマ建設に至った。

現在、基本的に月に2日間(土、日)の上映を行っている。1日当たり4回上映しており、

満席なら月に観客128人が入場できる。上映日の最終回には参加自由の座談会を設け、観客と双方向のコミュニケーションを図っている。観客の感想や意見を共有することによって作品についての「問い」や「学び」が生まれ、映像制作者としても毎回大きな「気づき」がある。16席というサイズは、気負わず話が交わせるという点からも適当だと2人は感じている。上映作品は社内のメンバーがそれぞれ推薦する作品を持ち寄り、協議して選んでいる。人があまり観ようとしなが観る価値がある作品、豊かさや幸せのヒントとなる作品を選んでいるという。

観客のボリュームゾーンとなっているのは40～60歳代の女性である。観客の中には映画館街があった時の有楽町に通っていた人たちもあり、身近に映画を観る機会を作ったこのシネマに対する熱い応援を送ってくれている。アウトクroppは、このシネマを、映画を媒体とした交流が生まれる場として定着させるため、継続可能な収益化の仕組みを試行錯誤している。

当社の中心事業である映像制作に関しては、ドキュメンタリー作品の制作と並行して、テレビCMや地域PR映像にも力を入れている。テレビで流れるCMを観ると、全国と秋田の落差が大きいと感じることが多く、全国レベルに遜色のない作品を当社で制作したいと考えている。

アウトクroppの創業により、秋田に映画という文化を核とした新たな交流拠点生まれ、映像で秋田を発信するための手段として、質が高く訴求力の強い新たな選択肢が加わった。

栗原氏、松本氏に質問①【A I Uで学んだことは？】

世界中の宗教、育ちが違う人とお互いを尊重し合う体験から「1人1人違っていい」と考えられるようになりました。(栗原氏)

リベラルアーツを通して答えのない問いを自分の行動から考えることを学びました。(松本氏)

②【秋田はどういう地域？】

白いキャンパスのようにチャレンジする余地が大きな所。「チャレンジしたい人は秋田に行ったらいいよ」と言いたいです。(栗原氏)

いろんな場面で、意思決定するのは年齢が高い男性だけと感じられ、今の時代に合った考えに変える必要があると思います。一方、文化、街並みなど誇るべきものも多く、「この上ない地方都市」になる可能性を感じます。(松本氏)

③【A I Uと秋田のつながりを強めるには？】

学生は地域と関わりたいし地域の人もA I Uと関わりたいと思っていますが、敷居が高いです。学生は自動車がないと外に出られず、いろんな所に行くきっかけが欲しいです。(栗原氏)

在学中に地域とのつながりが増えれば、卒業後も秋田に関わりたいと思うようになります。そのためには、学生と地域との接点を増やすことが大切です。(松本氏)

(2) 株式会社せん

株式会社せんは、かつて栄えた川反芸者の文化を復活させ「あきた舞妓」として事業展開することを目的に、2014年4月に設立された。創業者である水野千夏氏はA I U卒業生ではないが、その後、秋田ノーザンハピネッツ社長でもあるA I U卒業生・水野勇氣氏が社長を引き継いだ。この株式会社せんで、企画・営業担当として事業を運営しているのが松岡観美氏である。

松岡観美氏は、秋田県北秋田市の出身、2012年春入学のA I U9期生である。

松岡氏がA I Uへの進学を意識したきっかけは、高校生の時に5月と8月に行われるA I Uのグローバル・セミナーに参加したことだった。教授と学生が呼び捨てで名前を呼び合い一緒に食事をすることや、事務職員が学生に対して家族のように接してくれるA I Uの雰囲気を目撃したと思った。



松岡 叡美氏

A I Uでは、秋田県内高校生を対象として、このセミナーで提出したレポートや面接に基づいて評価を行う「グローバル・セミナー入試」という制度を設けている。松岡氏は、この入試制度を使ってA I Uに入学した。

A I U在学時の就職活動で、いくつかの企業や自治体のインターンシップに参加したが、その中で株式会社せんのインターンシップにも参加した。松岡氏は、その経験から、東京のIT企業の自由な働き方、自然も含めた秋田の環境の過ごしやすさ、両方を備えている点に価値を見だし、2017年、株式会社せんに入社した。

せんは、その前年の2016年、旧割烹松下をリニューアルし、「あきた文化産業施設松下」（以下、「劇場松下」）をオープンしていた。当社の事業は、メインである芸者や舞妓の育成・派遣に加え、劇場松下の場所貸し、関連商品「あきた舞妓応援商品」の販売を主としている。現在、せんには、芸者が2名、舞妓が1名、見習い生3名が所属している。あきた芸者は、踊り、三味線・唄、接客の科目を修めた者で、あきた舞妓は、必修科目である踊りを修めつつ芸者を目指して修業している者である。芸者や舞妓が踊り、唄などの芸を披露する機会は、劇場松下を舞台とする公演「あきた舞妓劇場」と料亭等に派遣されるケースが主である。「あきた舞妓劇場

への出場は、基本として毎週土曜日であり、日曜日等に団体客向けの公演が行われることもある。料亭への派遣は、以前は毎日のようにあったが、現在はコロナ禍で月数回に減少している。この他の芸者や舞妓の活動には、駅、港や空港などでの観光客の出迎え、観光客と一緒に街を歩く「まち歩き」、テレビ番組やCM、ポスターの撮影などがある。

松岡氏は、コロナ禍への対応も進めている。劇場松下の一室をオンラインスタジオに作り変え、2020年7月に「あきた舞妓オンラインお座敷」を開始した。また、修学旅行を受け入れた経験から、子どもと舞妓は相性がいいと気づき、踊りや茶道、作法などで構成した体験型商品を推進しようとしている。

株式会社せんの創業により「芸者」という秋田の文化が復活した。「会える秋田美人」というコンセプトで出発したこの事業により、秋田固有の資源を引き立たせる様々なコンテンツが創造され、秋田の観光に新たな魅力が生まれた。

松岡氏に質問 ①【A I Uで学んだことは？】

全国から海外から来た学生たちと出会い、それまで当たり前と思っていたことをぶち壊された衝撃がありました。周りの人と違うことを恐れず、挑戦することを学びました。

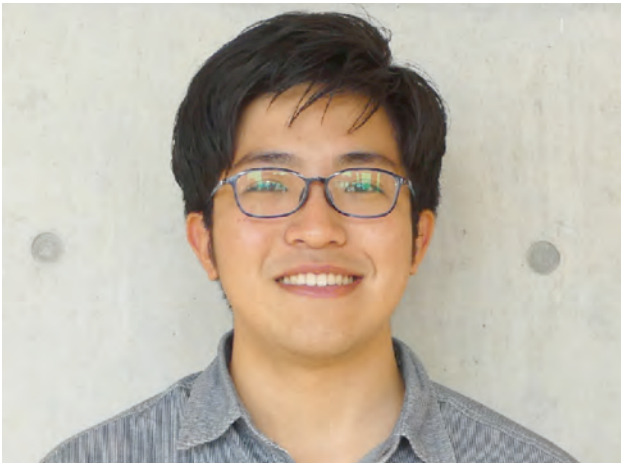
②【秋田はどういう地域？】

若者が、新しくこんな挑戦をしたい！と言うと応援者が殺到するイメージがあります。「秋田をなんとかしてほしい」、「もっと面白くしてほしい」という希望を若者に託そうとしてくれる方が多いように感じます。

③【A I Uと秋田のつながりを強めるには？】

私自身、学生時代にキャンパス外の人とたくさん交流できたことが人生の転機になりました。学生をどんどん雄和から引っ張り出して、積極的に秋田の人とのつながりを作ってほしいです。

(3) 茅葺の曲がり家 西の家



東風平 蒔人氏

ゴールデンウィーク初日となる今年4月29日、仙北市角館町で一軒の民宿が営業を開始した。築135年の古民家の宿を事業継承し「茅葺の曲がり家 西の家」として再スタートさせたのが東風平（こちひら）蒔人氏である。

東風平氏は沖縄県の出身。A I Uに2015年の秋に入学した12期生であり、アウトクロップの栗原エミル氏とは同期になる。

子どもの頃にネパールで生活した経験もある東風平氏は、密度の高い英語学習が出来ることや、リベラルアーツにより幅広い勉強ができることを理由にA I U進学を決めた。

大学時代には仙北市の地域おこし協力隊のインターンシップを体験した。その際、東風平氏は仙北市が力を入れている「教育旅行」に関心を持った。これは、わらび座や市内の農家民宿と連携し、台湾など海外を含む県内外の学校から生徒を受け入れ、農作業や民俗芸能など様々な体験学習を行うものである。

2019年9月、東風平氏はA I U卒業と同時に正式に仙北市地域おこし協力隊に就任した。主な担当は観光面であり、グリーンツーリズムの推進や体験型観光のコンテンツ作りに取り組んだ。その過程で、農家民宿が一つの課題を持っていることに気づいた。仙北市では農家民宿が

盛んだが、少子高齢化が進む中で担い手が高齢化する一方、若い年代層へ事業承継は必ずしもスムーズに進んでいなかった。東風平氏は、秋田花まるっグリーン・ツーリズム推進協議会の事業承継を考えるワークショップに参加し、自分が農家民宿の事業を行うことを具体的な選択肢の一つと考えるようになった。

「西の家」は角館の武家屋敷通りから歩いて7分程の場所に立地している。2019年まで自家のオーナー夫妻が経営しており、冬期を除く8か月で約400人の宿泊客を受け入れ、うち4割程が外国人客だった。しかし、コロナ禍により休業を余儀なくされ、先が見えない中でも先祖代々受け継いできた茅葺屋根はなんとか維持していきたいという思いを抱いていた。その思いを知った東風平氏は、自身が民宿事業を承継することを提案し、今回の営業再開に至った。

「西の家」は、「人との交流」にフォーカスした事業にしようと構想した。地域おこし協力隊で担当した体験型コンテンツ作りのノウハウを活用し、「山菜名人と山に登る」、「味噌造りと味噌のテイスティング」などの体験型コンテンツ提供を計画している。食事も、囲炉裏でのきりたんぼ作りやバーベキューなど体験を取り入れた形を考えている。価格面では、一組限定の宿泊客に対してディープな秋田を体験するという価値を提供することで、その価値に見合った高い価格体系としている。東風平氏は、収益性を高めて農家民宿を若い世代が事業承継する可能性を大きくすることをねらいの一つとしている。

秋田県の地域資源を活かした農家民宿は観光の有力なコンテンツとなっている一方で、若い世代への事業承継という課題を抱えている。この「西の家」が成功すれば、農家民宿による収益性を高めると同時に、若い世代への承継の可能性を広げるといった効果もたらされる。

東風平氏に質問 ①【A I Uで学んだことは？】

エネルギーにあふれた人たちと出会い、衝撃を受けました。国際ボランティアになった人や若くしてコンサル会社の部長になった人など、日本中、世界中で活躍するいろんな仲間が秋田で集まれる場所を作っておきたいです。

②【秋田はどういう地域？】

一年をほぼ四等分するように四季がはっきりしていて、生活にも季節の移り変わりが根付いている点が秋田の良い所だと思います。一方で、少子高齢化から派生する様々な問題に対して、まだまだ危機感が足りないと思います。

③【A I Uと秋田のつながりを強めるには？】

大学時代、5人の仲間とキャンパスから出て雄和でシェアハウス生活を始めたら、近所の人たちから野菜をもらうなど地域とのつながりが生まれました。その仲間に栗原エミルもいるのですが、5人とも現在も秋田に残っています。

(4) Blue Buck Diner -バーガー修吾-

毎月第2、第4週の金曜、土曜、日曜の3日間、JR男鹿駅前広場でキッチンカーによるハンバーガー店「Blue Buck Diner-バーガー修吾-」が営業を行っている。このバーガー修吾を運営しているのが大橋修吾氏である。

大橋氏は、アメリカカリフォルニア州生まれで、静岡県育ち。2013年の秋に入学したA I U 10期生である。

大橋氏がA I Uを知ったのは親から渡されたパンフレットがきっかけだった。高校2年と3年の時にA I Uのオープンキャンパスに参加し、模擬授業で学生が積極的に発言しディスカッションすることに魅力を感じた。

大学時代、アメリカに留学して社会起業論を学んだことや、宮城県女川町の起業支援、移住支援を行うNPOのインターンシップに参加したことなどから、大橋氏は「自分で起業し地方



大橋修吾氏

で働くこと」を選択肢の一つとして意識するようになった。そして、2018年8月に大学を卒業して男鹿市の地域おこし協力隊に就任し、得意な英語を活かし観光情報の翻訳などを担当した。

大橋氏は週のうち5日を地域おこし協力隊として活動し、残り2日で場所を間借りしてハンバーガー屋を開業した。そうする中で、次第にキッチンカーによるハンバーガー店の事業構想が固まっていった。

男鹿で食べるものと言えば海産物が主となる。しかし、海外の人にとってサザエやギバサは馴染みがない食品であり、肉も食べたいだろう。また男鹿に自動車でも来てもテイクアウトする食べ物があまりない。これらの課題を解決するために「キッチンカーによるハンバーガー店」というコンセプトは最適と考えられた。観光地は、平日と週末、オンシーズンとオフシーズンで人の流れに大きな差が生じるが、キッチンカーでの営業ならそれに対応することも可能となる。

2021年3月に地域おこし協力隊を退任した大橋氏は、ワンボックスカーの改装など開業に向けた準備を進め、2021年8月のプレオープンを経て、2021年9月末に「バーガー修吾」の本格オープンに至った。

商品は、ハンバーガー1,200円とチーズハンバーガー1,300円（いずれもポテト付き）の2

種類のみ。アメリカで食べたハンバーガーのスタイルにこだわり、肉は秋田錦牛100%、パンも自分で焼いたアメリカ風のしっかりしたパンを使っている。注文を受けてから手作りし新鮮なうちに食べてもらうスタイルを貫いている。価格は初めて見た人にとっては高いと感じられるようだが、内容を知った客からは「むしろ安いくらい」と言われるという。

大橋氏は自分の事業を通して、次の世代がチャレンジできる環境づくりにつながることを期待している。

「Blue Buck Diner-バーガー-修吾-」は、地域おこし協力隊の活動体験に基づいて地域観光の課題を発見し、それを解決するために生み出された事業である。身軽なキッチンカーという営業形態は、営業可能な地域、時間の幅を広げ、それにより様々な場面で様々な用途に応用される可能性を切り開いた。

大橋氏に質問 ①【A I Uで学んだことは？】

寮生活を送る中で仲間と一緒に過ごすことの充実感、幸せを知りました。また、従来はなかったA I Uのパーカーを自分が働きかけることで製作・販売に結び付けられ、一つ自分を越えることに成功したと思います。

②【秋田はどんな地域？】

秋田はビジネスチャンスが多いのに対し、プレーヤーが少ないので、応援する人とつながることが出来れば思った以上のスピードで事業を進められるという体験をしました。

③【A I Uと秋田のつながりを強めるには？】

地元の人にはA I Uに行きたいと思っても、公共交通の少なさなどで行きにくい面があります。例えば、A I Uに来ている留学生が自国の料理を作る「ごはん会」を開催し、地域の人にも参加してもらって異文化理解を進めるイベントを行ってはどうでしょうか。

(5) 合同会社秋山里山デザイン



大西克直氏(右)と保坂君夏氏

合同会社秋山里山デザインは、生産者と消費者の結びつきを強めた透明性、納得性の高いコーヒー流通のシステム作りに取り組むと共に、コーヒー販売の収益を利用して男鹿の耕作放棄地を再生利用する事業を行っている。同社を創業したのはA I U生(当時)の大西克直氏と秋田県立大学生(当時)の保坂君夏氏である。

大西氏は、東京都出身。2016年春にA I Uに入学した13期生となる。

高校生の時にオーストラリアに短期留学した体験などから、大西氏は文化の違いに関心を持ち国際系の大学への進学を考えるようになった。そして、留学生の数が多く、オープンキャンパスの参加体験が刺激的だったことが決め手となって、A I Uへの進学を決めた。

もともとコーヒーが好きだった大西氏は、大学時代に1年程休学し東京の有名店でコーヒーの淹れ方を修行するくらい入れ込んだ。その中で、コーヒーの生産者と消費者の関係にも関心を持った。そして、秋田も農産物の生産地であるが、秋田の生産事情について何も知らないことに気づき、休学をさらに1年間延長して秋田の農業生産者を訪ね歩いた。

その過程で秋田の自然豊かな田園風景に惹かれたが、一方で高齢化が進んで耕作放棄された

田畑が増えていることに寂しさを感じた。その頃、大西氏は秋田県立大生の保坂氏と知り合いになった。お互い同じ問題に関心があると知った2人は、一緒に耕作放棄地を借りて開墾し、アズキなどを育てる活動を始めた。

その一方、エチオピアなどからコーヒー豆を買い入れて焙煎しネット等で販売する「さとやまコーヒー」の事業も開始した。コーヒーの販売代金を放棄地に植え付ける苗などを購入する資金に充てることで、二つの活動は関連づけられている。この事業を行うため2人は、2021年7月に合同会社秋山里山デザインを設立した。

大西氏は今年3月、コーヒー豆の買い付けのためにエチオピアの生産農場を訪れた。その際に、生産から消費に至るコーヒーのサプライチェーンが複雑で、生産者に還元される金額が少ないこと、生産国の道路などのインフラが整備されていないこと等の問題を知った。そこで、エチオピアのコーヒー豆供給者と連携して、これまで7業者が関与していたサプライチェーンを、輸出側1社、輸入側1社(秋山里山デザイン)に集約しようと計画している。これにより、品質や利益配分の透明性の高いコーヒーブランドを構築し、生産者にも適正な利益が還元されるようにすることを狙いとしている。

同社はこの新しい流通システム構築のためにクラウドファンディング(※)を実施し、必要な設備の購入等に充てる予定である。

※<https://camp-fire.jp/projects/view/576643>

秋山里山デザインの事業は、エチオピアなどのコーヒー豆生産者と日本の消費者側の関係を透明性の高いシステムに作り直し、それと並行して秋田の耕作放棄地を活用して地域のあり方を変えようとするもので、グローバルな問題とローカルな問題を結びつけるスケールの大きな取組みである。

大西氏に質問 ①【A I Uで学んだことは？】

リベラルアーツの授業で幅広く学ぶことで、いろいろな点と点がつながり、自分の頭で考え発言することができるようになりました。

②【秋田はどういう地域？】

チャレンジする若者が少ないと思います。秋田は食料も豊かで「死なない場所」というイメージがあります。その安心感からイノベーションが起きないという面もある一方で、安心してチャレンジできるという面もあると思います。

③【A I Uと秋田のつながりを強めるには？】

A I U生は車がないと外に出られないので、外に出る機会を増やして欲しいです。男鹿の耕作放棄地に7人のA I U生を連れてきたら、その一人が「男鹿に住みたい」と言いました。また、同世代がチャレンジしている姿を見せ、秋田でも自分や地域の課題にチャレンジすることが出来ると思えるようになることも大事です。

(6) 一般社団法人 FROM PROJECT

一般社団法人FROM PROJECT(秋田市)は、課題解決型学習などの手法により、中学生・高校生が主体的に学び行動できるようになるための教育プログラム「ふろぷろ」を秋田市など全国各地で実施している。同法人を設立し代表理事を務めるのが竹内董氏である。

竹内氏は、東京都出身。2015年秋に入学したA I U12期生で、栗原エミル氏、東風平蒔人氏と同期生になる。

アメリカ・グアムで高校生活を送った竹内氏は、英語のコミュニケーションに慣れていることもあり、英語での授業に特徴のあるA I Uへの進学を選択した。「ふろぷろ」はもともと慶應義塾大学鈴木寛教授が開発したプログラムである。竹内氏は、「ふろぷろ」を高校生の時から知っていたが、A I U生になって「ふろぷろ秋田」を立ち上げ、活動を開始した。



竹内 董氏

「ふろぷろ秋田」は秋田市で、中・高校生を対象に「ふろぷろ」の課題解決型プログラムを提供するプロジェクトである。竹内氏には、その活動の中で一つ印象深いエピソードがある。参加した一人の秋田の男子高校生に、プログラム開始時に「何かやりたいことある？」と聞いても「特にないっすね」とあまり積極的と思えない答えが返ってきたが、3か月後の最終報告会では、その生徒が「やりたいことを見つけたけど、やりきれなかった。くやしい」と涙をぼろぼろこぼした。それを見た竹内氏は、「ふろぷろ」は人をこんなに変化させられるんだと、このプログラムの価値を再認識した。

竹内氏はA I U在学中、関心がある仕事を試すため1年程休学し、7社のインターンシップに参加した。その傍ら東京のふろぷろ本部の状況を調べてみると、立ち上げメンバーが大学卒業でいなくなり混乱した状況だった。竹内氏は本部となる法人を新たに立ち上げることにし、2020年3月、一般社団法人FROM PROJECTを設立。さらに、ふろぷろを中心として自分がやりたいことに集中するためA I Uを退学し、新たな活動をスタートさせた。

従来、本部から人を派遣して各地域のふろぷろを実施していた形を改め、ふろぷろ秋田など各地域の活動はその地域の大学生が主体的に進

める形にした。秋田県内ではA I U生が中心となり、これまで秋田市、にかほ市、横手・湯沢地域などでプログラムが実施され、約130名の高校生が参加している。全国では、24地域で3,000人以上の参加実績をあげている。

竹内氏は現在、神奈川県に在住しているが、今後も、全国の中高生が自分で自分の人生を考えて、考えたことを実現する力を育てる手助けをしていこうと考えている。

「ふろぷろ」に参加した中学生、高校生は、自分が生活する地域を見つめ直し、その課題を考えるだけでなく、主体的にその課題を解決するための行動を企画・実行することを学ぶ。県内で「ふろぷろ」に参加する高校生等が着実に増えていることは、若者と秋田という地域の結びつきを深め、明日の地域の担い手育成につながっている。

竹内氏に質問 ①【A I Uで学んだことは？】

「地域格差」というものではなく、「意識格差」があるだけかも知れません。知ろうという意識があれば、今はネットで調べることも人から教わることも可能です。

②【秋田はどういう地域？】

冬の露天風呂のような所です。最初、「秋田の人は冷たい」と感じて、一歩中に入ると温かくて居心地が良くて抜け出せなくなります。

③【A I Uと秋田のつながりを強めるには？】

地域と関わりたい学生もいるし、A I Uと関わりたい地域の人もいるので、両者をマッチさせられます。A I U生は「用意されたものに参加すること」より「自分で考えて作ること」に興味があるので、「一緒にやりませんか」と提案すればワクワクして乗って来ると思います。

※ 2022年6月号「後編」に続く。

（株式会社あきぎんりサーチ&コンサルティング
荒牧 敦郎）